

宇治群島家島における鳥類センサス調査

江口 和洋

九州大学大学院理学研究院生物学部門

要旨

2005年5月10日, 宇治群島家島において鳥類のセンサス調査を行った. トビ *Milvus migrans*, ミサゴ *Pandion haliaetus*, ハヤブサ *Falco peregrinus*, コサギ *Egretta garzetta*, チュウサギ *E. intermedia*, ササゴイ *Butorides striatus* (若鳥), ツバメ *Hirundo rustica*, メジロ *Zosterops japonicus*, ハシブトガラス *Corvus macrorhynchos* の6科9種が目撃されたが, 繁殖確認はミサゴ1種だけであった.

キーワード: 宇治群島, 生物移入, 鳥類相

A brief survey of birds at Uttchima Islet in Uji Islands

EGUCHI Kazuhiro

Department of Biology, Faculty of Science, Kyushu University

Abstract

On 10th May 2005, I conducted a brief survey of birds at Uttchima Islet in the Uji Islands, Kagoshima Prefecture. In total, nine species (six families) were sighted; Black kite *Milvus migrans*, Osprey *Pandion haliaetus*, Peregrine falcon *Falco peregrinus*, Little egret *Egretta garzetta*, Intermediate egret *E. intermedia*, Green-backed heron *Butorides striatus* (juvenile), Barn swallow *Hirundo rustica*, Japanese white-eye *Zosterops japonicus*, and Jungle crow *Corvus macrorhynchos*. I confirmed only one species (Osprey) breeding.

Key words: Avifauna, Biological invasion, Uji Islands

1. はじめに

宇治群島は宇治島 (通称「家島」: 以下, この名称を使用) と向島の2島を主要島とする無人島群で, 笠沙町野間池から約70 kmに位置する (成尾ら2002). 家島は周囲約5 km, 最高点は95mの小島で, 周囲は切り立った断崖と岩礁からなり, 島内は急峻で, 照葉樹林に覆わ

れている（桑水流ら 2004）。

著者は、2005年5月9日～11日、鹿児島大学水産学部調査船南星丸による宇治群島調査に参加する機会に恵まれ、鳥類の生息状況を調べると同時に、移入動物（カイウサギ）の鳥類への影響を把握するために、宇治群島家島に上陸してセンサス調査を行った。以下に、簡単ながら調査結果を報告する。

2. 調査地の概要と調査方法

調査は2005年5月10日に行い、天候は晴れ、微風であった。島内を歩き、出現（視認、鳴き声確認、痕跡発見など）した鳥類の種名、個体数を記録した。センサスルートは図1に示す。

8:15 小浦波止に上陸、溪流北側沿いに登り、8:57 小浦波止北側の87mピーク東側のピークに到達。ここから尾根沿いに南下し、9:40 南日岳頂上（95m）着。これより尾根沿いに片浦波止へ降りる。10:20 片浦波止着。周辺を調査しつつ、南側の尾根へ登る。11:40 南側81mのピークに到達。これより片浦波止を経由して小浦まで戻る（13:00）。午後、15:00 から灯台への階段道沿いに南日岳頂上へ登り、小浦波止へ戻る（15:30）。

調査地の大まかな植生は以下の通りである。小浦波止付近の平地には放棄された建物が数棟あり、ヤブマオの1種（成尾ら（2002）に従い、以下、ニオイヤブマオウとする）が優占し、ハチジョウススキは少数株が散在していた。片浦波止付近も同様にニオイヤブマオウが優占し、ハチジョウススキが散在していた。標高約10m以上の斜面部分はモクタチバナ、タブノキ、ハマビワ、ハマヒサカキなどの低木林となり、林床部の植生は貧弱で、ナンゴクアオイなどがわずかに生育していた。南日岳南東の標高50m付近はリュウキュウチクが繁茂していた。

3. 結果および考察

【鳥類相の特徴】

観察された鳥類は以下の通りである。

タカ目：トビ、ミサゴ、ハヤブサ

サギ目：コサギ、チュウサギ、ササゴイ（若鳥）

スズメ目：ツバメ、メジロ、ハシブトガラス

その他、アマサギ（4体）、アオサギ（1体）、ツバメ（1体）、ササゴイ若鳥（1体）の死体を発見した。アマサギはいずれも死後数週間を経ていなかった。日本本土への渡りの途中に立ち寄った個体がハヤブサ等のワシタカ類に襲われたものと思われる。これ以外に、ホオジロ様の小鳥をニオイヤブマオウ群落内で、ハト大の鳥を2度林内で一瞬目撃したが、種同定には到らなかった。さらに、キセキレイと考えられる鳥の聞き込み情報があった。片浦の東海岸の岩礁上にミサゴの巣があり（桑水流他（2003、2004）でも報告）、抱卵中であった。

天候は穏やかであったにもかかわらず、小鳴きん類のさえずりが全く聞かれず、ワシタカ類、サギ類、ハシブトガラスという肉食、魚食、雑食の種がほとんどを占めるという特殊な種構成

を示した。今回は一日だけの短時間の調査であり、精度はそれほど高くはないが、同様な傾向は過去のどの調査でも見られている（成尾ら 2002；桑水流ら 2003、2004）。宇治群島ではこれまでに 37 科 123 種が記録されているが、繁殖はオオミズナギドリ（向島）、ミサゴ（家島、向島）、カラスバト（家島）の 3 種で確認されているにすぎない（桑水流ら 2004）。照葉樹林内の下層部の発達は貧弱で、林外ではニオイヤブマオウが繁茂するというように、ヤブを形成する植生は単純である。このような植生の構造は小鳴きん類の繁殖に適していない。このため、渡り鳥の通過時期以外は小鳴きん類の生息がほとんど無いのがこの島の特徴であるかも知れない。

【カイウサギの影響】

成尾ら（2002）は多数のカイウサギを目撃している。今回、カイウサギの姿を目撃することは無かったが、糞は海岸部からそれぞれの頂上部付近までほぼ全域に分布していた。林内ではナンゴクアオイに食痕が見られた。小浦や片浦地域では過去に小規模の畑地があったと思われる（波多江 1956）。畑地の放棄後は通常ススキなどのイネ科植物が繁茂するが、家島ではニオイヤブマオウが繁茂していた。波多江（1956）が行った調査当時（1953 年）には、これらの地域はハチジョウススキに覆われていたことが報告されている。笠沙町誌に掲載された写真をみても、ハチジョウススキが繁茂していたことがわかる。しかし、現在ではハチジョウススキの密度は非常に低く、かわって、ニオイヤブマオウが優占している。ニオイヤブマオウには食痕は見られなかった。ハチジョウススキはカイウサギの摂食により衰退し、カイウサギが好まないヤブマオウが勢力を広げたと思われる。少なくとも海岸部の草地ではカイウサギは植生に大きな影響を与えたのではないかと思われる。その植生の変化は草原性の鳥類に影響したかも知れない。

最後に、今回の調査に参加する機会を与えていただいた鹿児島大学の関係者の皆様、および南星丸の乗組員の皆様に厚くお礼を申し上げます。

引用文献

- 波多江信広(1956) 宇治群島及び草垣島の地質. 鹿児島大学南方産業科学研究所報告 1 : 1-12(「笠沙町誌」より引用)
- 桑水流淳二・森田康夫・丸野勝敏・廣森敏昭・行田義三・坂下泰典・中間弘・成尾英仁・桑水流淳二・森田康夫・丸野勝敏・山元幸夫・廣森敏昭・行田義三(2002) 宇治群島家島の自然調査概要報告. 鹿児島県立博物館研究報告 21 : 1-25.
- 桑水流淳二・中峯浩司・小倉豪・中間弘(2004) 宇治群島の自然調査報告(その3) 鹿児島県立博物館研究報告 23 : 1-20.
- 山元幸夫・鮫島正道・溝口文男(2003) 宇治群島の自然調査報告(その2) 鹿児島県立博物館研究報告 22 : 1-58.



図1. 宇治群島家島センサスルート. 網掛け部分はニオイヤブマオウの群落